

第2回星野立子賞 『的礫』（角川書店） 西嶋あさ子氏

綿虫の綿のあをきも淡海かな	寒木に月光惜しみなかりけり
大根をすたとんと切つて一人なる	木の葉髪むかしは髪を驕りけり
凍蝶に火柱の立つ没日かな	箔を置くやうに吉野の春の月
この世また一日過ぐる桜かな	紅梅は暮れ白梅に立つは死者
ほとけさまなれど母の日ちらし寿司	わが死後のひひな思へり納めけり
風邪癒えてまつ存念の櫻見に	お玉杓子尾がうれしくてうれしくて
年々や桜にかなふ髪の白	白牡丹捨身にまどひなかりけり
夏潮や帽深く征き十九歳	葱坊主子を持たざれば子に泣かず
的礫と寒梅一枝一周忌	草の花母負ひしことなかりけり
一所懸命紅梅も白梅も	鬼の子の月よりの糸たぐりけり
加賀膳のまづは枸杞酒や春の雪	去年今年けやきは常になつかしき
満開の桜の下の昏さかな	寒木の一枝一枝やいのち張る
たかんなの金剛力を蔵しけり	面打ちになほ見ゆる面秋の暮
蟻一つ文机を行く師の忌かな	一輪の一穢なき白帰り花
ひとりづつ死んでゆきたる紅葉かな	火の色のときをり赤し札納